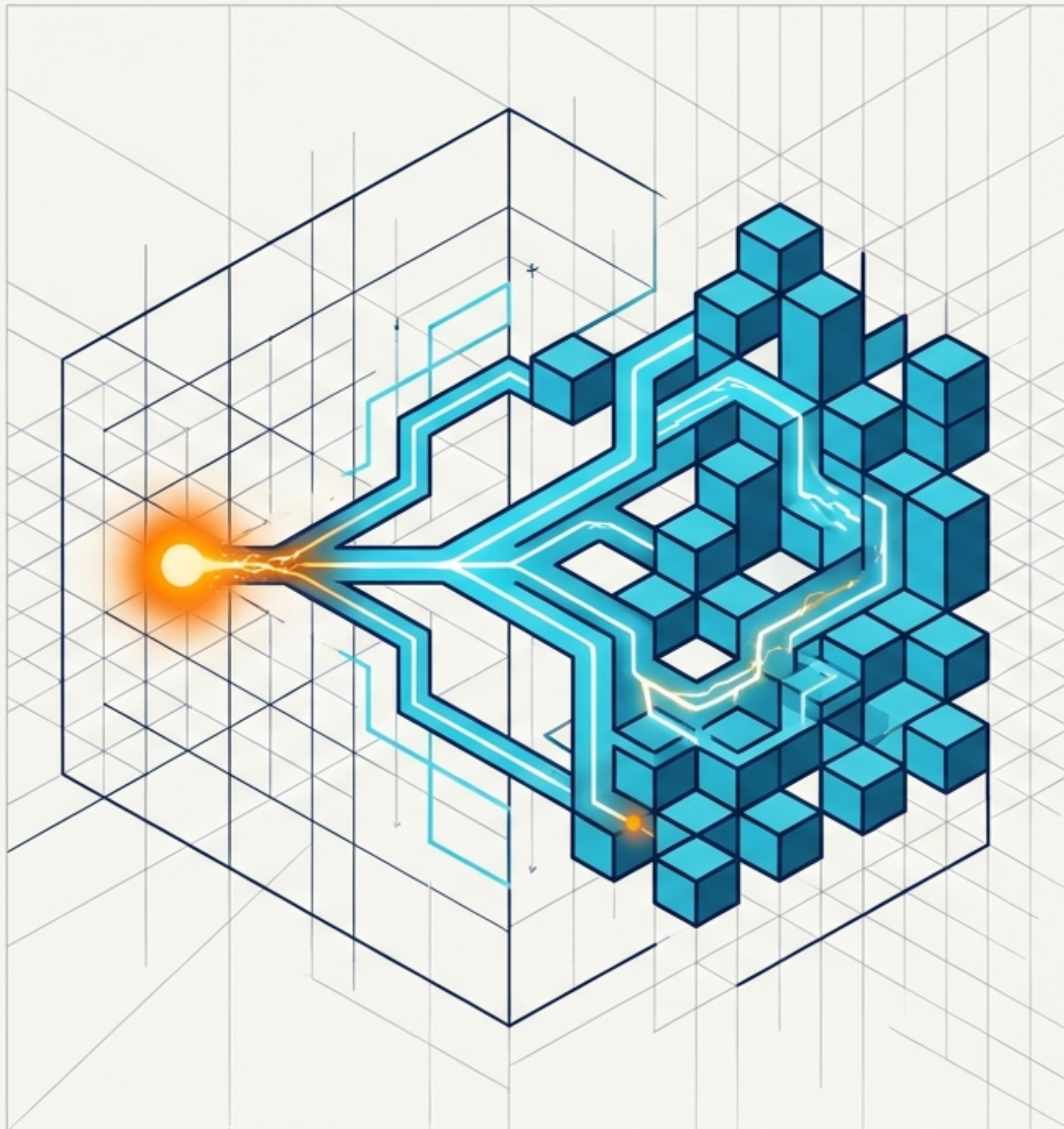




発明発掘と創出を 革新する、知財生 成AIの地殻変動

2025-2026年が見せたパラダイムシフト
と、知財部門の新たな存在意義

Executive Summary



[1] 適用領域の最上流への遡上

AIの役割は「下流の書類作成代替」から、「最上流（R&D連携）での発明発掘・インフラ」へと質的転換を遂げた。



[2] アーキテクチャの完全な二極化

オープンな社内基盤統合（MCP）と、未公開発明を物理的に守る完全秘匿・隔離環境（オンプレ/ローカル）の明確な棲み分けが成立。



[3] 知財部門の再定義

「事務管理・防衛的知財」からの脱皮。事業競争力をデザインする「ビジネスアーキテクト」としての戦略的構想力が問われる時代へ。

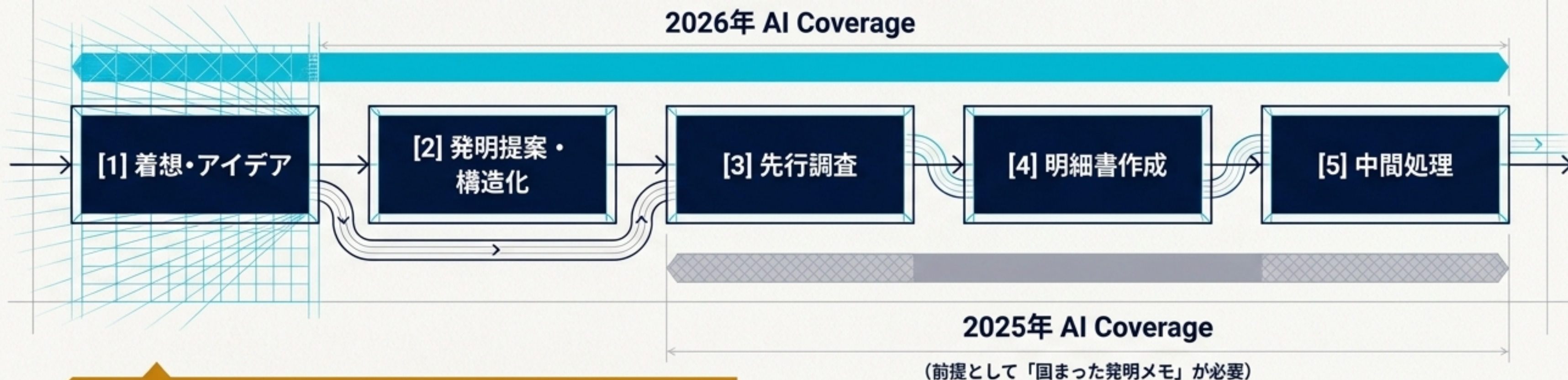
The Paradigm Shift: 2025年 vs 2026年

知財・情報フェア（171社出展/AI関連講演67%）が示した劇的な構造変化

	2025年（PoC・実装検証期）	2026年（パラダイムシフト）
[対象工程の重心]	下流・中流（調査要約・明細書ドラフト）	最上流（創出・発掘・R&D連携）
[AIの処理方式]	既存メモの要約・定型フォーマット整形	対話型問診補完・構造的思考フレームワーク
[システム形態]	単体完結・各社独立Web UI	MCP/APIによる自社LLM環境との統合・境界消失
[インフラ・機密設計]	クラウド（オプトアウト契約）への依存	物理的隔離・ローカルLLM・オンプレ専用機
[人とAIの役割]	AIによる「人間の作業代替」と工数削減	AIの自走×専門家の法的責任（人機協調体制）
[組織の問題意識]	「安全に導入できるか」というPoC	「定型業務代替後の知財人材の価値向上」への危機感

Transformation 1: イノベーション最上流への遡上

Intellectual Property Value Chain (Upstream River Flow)



最大のボトルネックであった
『研究者の文章化リソース不足』を直接解消。
暗黙知から発明を能動的に引き出すインフラへ。

Transformation 2: 静的プロンプトから「認知的フレームワーク」へ

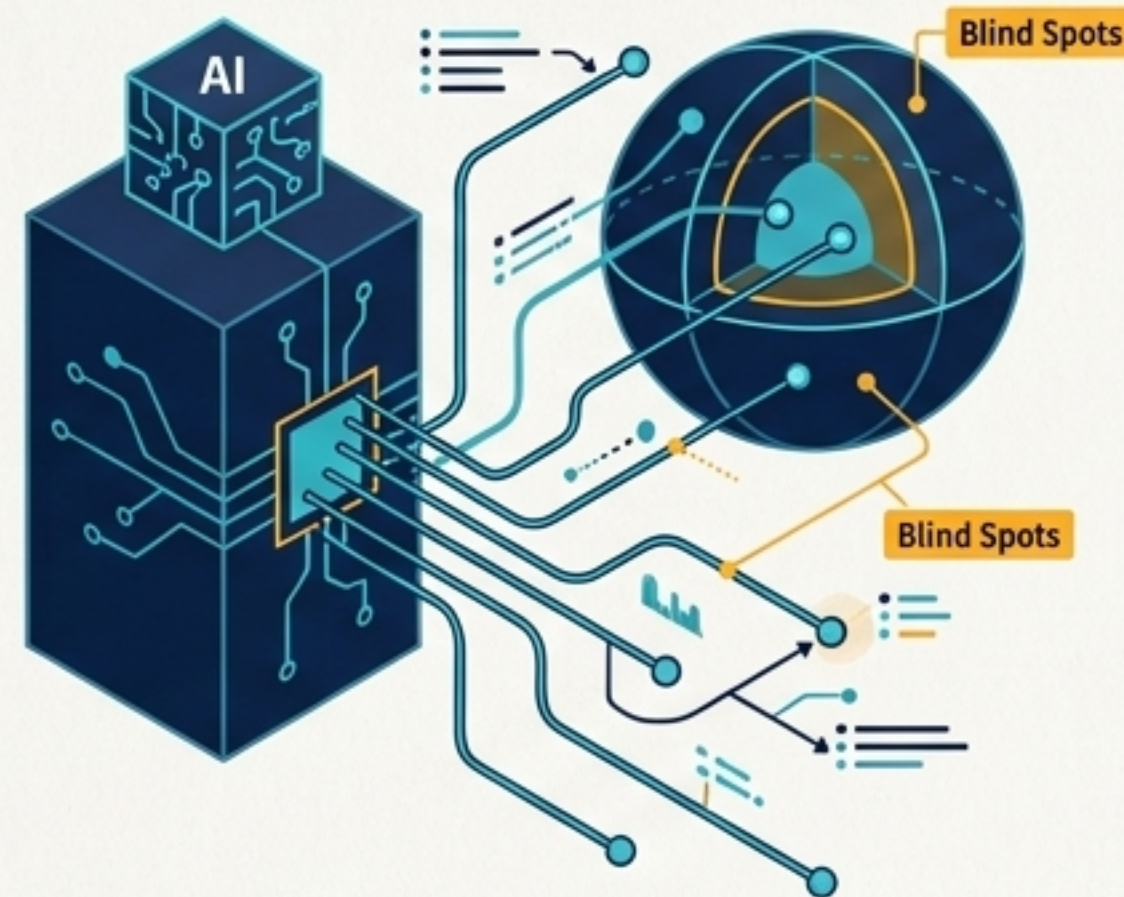
従来のチャットUI



2026年 多次的UI

[1] 対話型問診 (NTTデータ)

従来技術の欠点や必須構成要素をAIが自律的にヒアリングし、初期段階で「発明の棚卸し」を完了。

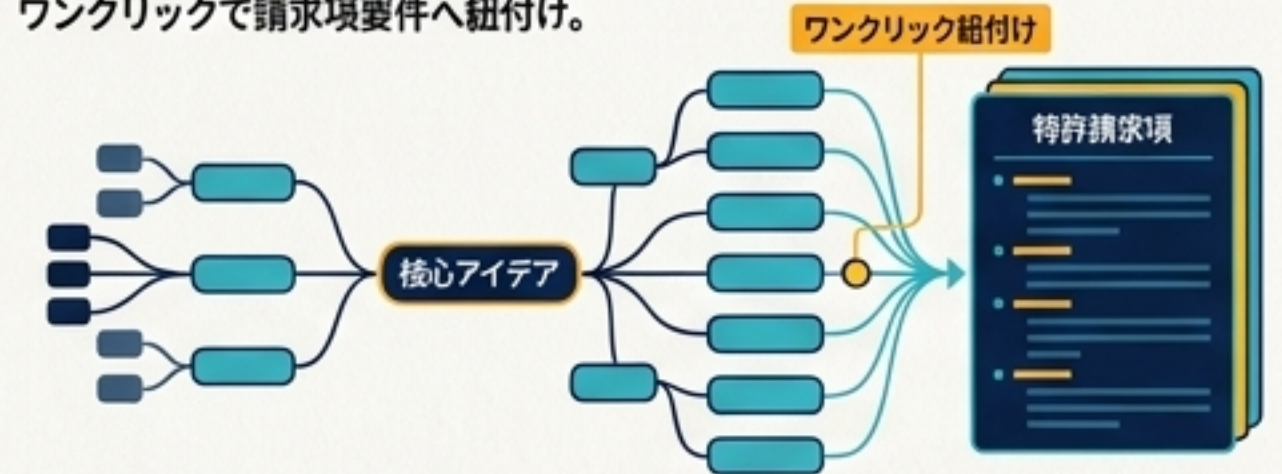


[2] マインドマップ型UI (aiip)

従来技術の欠点や必須構成要素をAIが自律的にヒアリングし、初期段階で「発明の棚卸し」を完了。

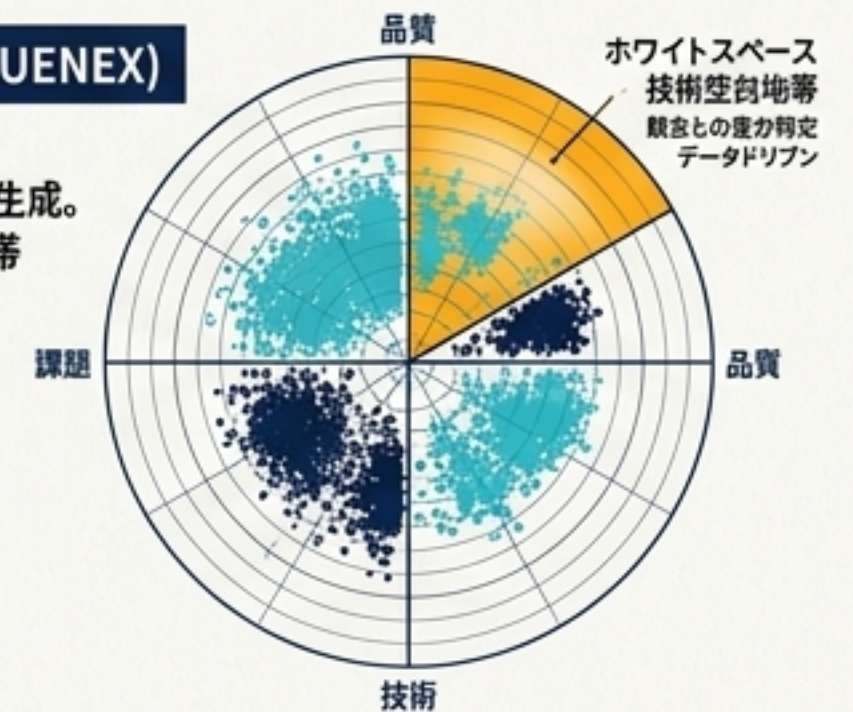
[2] マインドマップ型UI (aiip)

アイデアの発散・収束を視覚化。派生した技術要素をワンクリックで請求項要件へ紐付け。

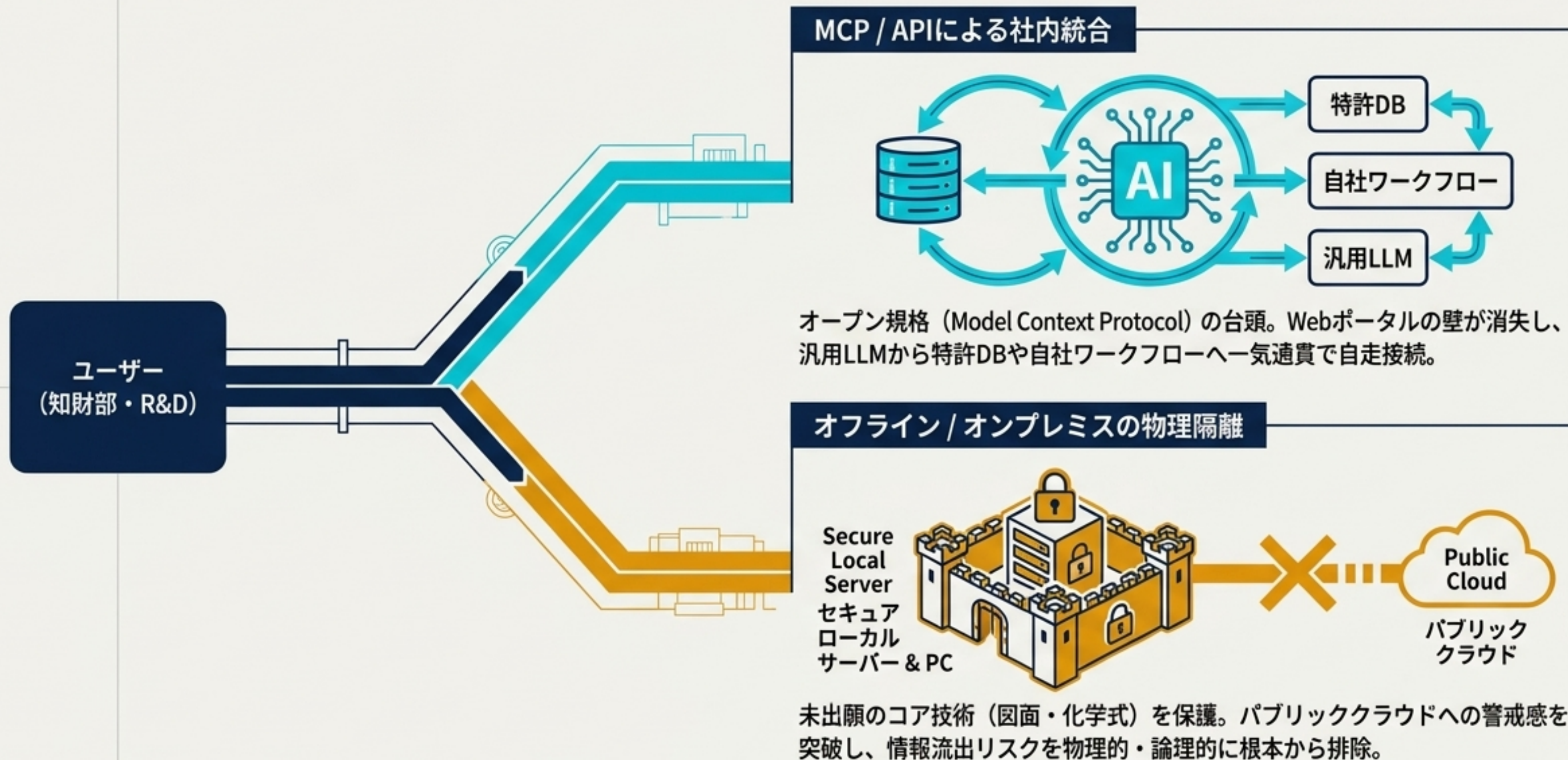


[3] Radar QFD (VALUENEX)

膨大な特許集合から「課題・技術・品質表」を自動生成。競合との差分や技術空白地帯（ホワイトスペース）をデータドリブンで特定。



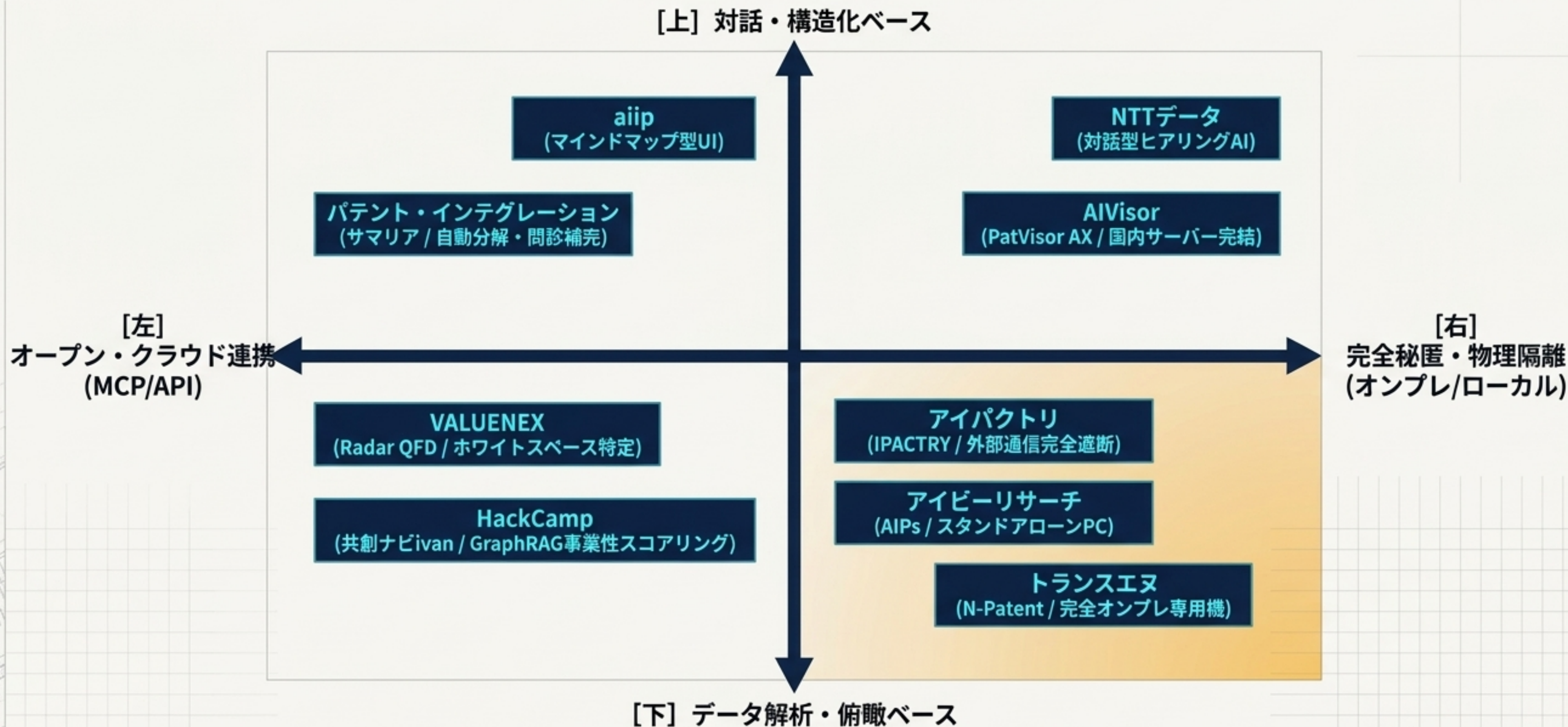
Transformation 3: インフラアーキテクチャの明確な二極化



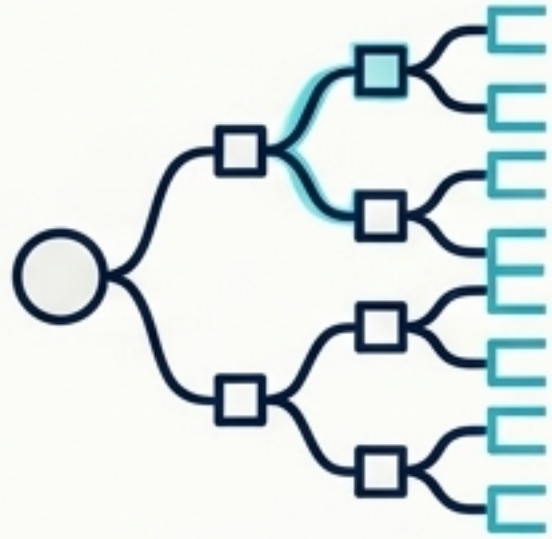
用途に応じたインフラの明確な棲み分けが成立。

2026 Vendor Landscape: 発明発掘・創出ソリューションマップ

Editorial Blueprint



Spotlight: 発想拡張・統合アプローチ (Innovation Catalysts)

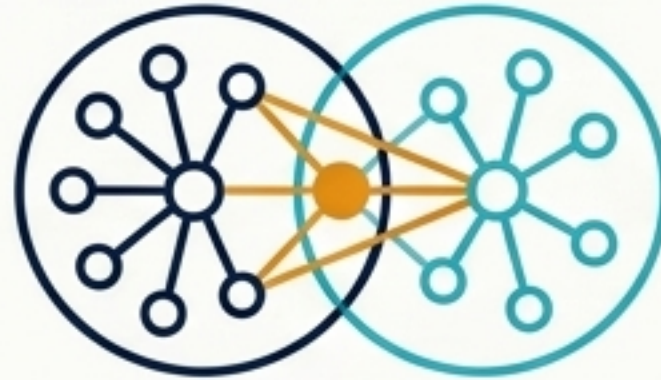


パテント・インテグレーション

課題・構成・効果の自動分解

発明メモの不足をAIが問診補完し、先行技術を自動査読。調査結果を反映した提案書を一気通貫で生成。

特許・コア技術 市場課題



HackCamp

共創ナビvan (GraphRAG)

自社の休眠特許・コア技術と市場課題を照合し、新規用途や事業コンセプトを探索・事業性スコア化。



aiip

マインドマップ統合 × 事務所連携

AIの圧倒的な生成速度と、スズエ国際特許事務所連携による「弁理士の法的責任」を両立させた実務ハイブリッドモデル。

Spotlight: 絶対的機密保持アプローチ (Fortress Infrastructure)

未出願の最重要機密を扱うため、クラウドの利便性よりも物理的な情報遮断を最優先するインフラ群。



アイビーリサーチ「AIPs」

ネットワークから物理隔離されたスタンドアローンPC駆動。特許専用ローカルLLMにより、図面や化学式画像を完全秘匿状態で解析・生成。



アイパクトリ「IPACTRY」

グローバル製造業向け、社内ネットワーク内で完結するOn-Premise構築型。社内規定に完全準拠した届出書作成支援。



トランスエヌ「N-Patent」

企業専用のハードウェア機材を社内に配備。最先端の生成モデルを社内境界内に閉じ込める完全オンプレミス専用機。

新たなボトルネックの発生と「人機協調」の必要性

AIが創出した膨大なアイデア・明細書案

課題（The IP DoS Attack）

AIの自走化により処理速度は劇的に向上したが、最終的な権利の強さを担保する「専門家の精査・法的判断」が追いつかない状態が発生。

解決策：社内AIの統制と内製化

AIDAO社が提唱する「現場伴走エンジニア（FDE）」の配置。企業固有の審査基準や過去の権利化ノウハウをAIに学習させ、知財部自身がAIを統制する「自走化体制」の構築が必須に。

人間の確認・法的判断

IP DoS Attack

The New IP Professional: 知財部門の役割再定義



Strategic Imperatives: 次のステップへの提言

01	02	03
導入目的のアップデート	インフラの適材適所設計	「構想力」へのリソースシフト
AIを単なる「省力化ツール」と見なす段階は終了した。R&Dの暗黙知を資産化する「イノベーションの中核インフラ」として、予算と体制を再構築せよ。	利便性（MCP/クラウド）と機密性（ローカル/オンプレ）の境界線を社内規定で明確化し、用途に応じた複数のソリューションを組み合わせよ。	ツールの導入速度ではなく、AIの出力を批判的に吟味し、事業成長のストーリーへと結びつける「次世代知財人材」の育成を最優先課題とせよ。

“The future of IP belongs not to those who automate the fastest, but to those who architect the best.”

（知財の未来は、最速で自動化する者ではなく、最適に設計する者の手にある。）